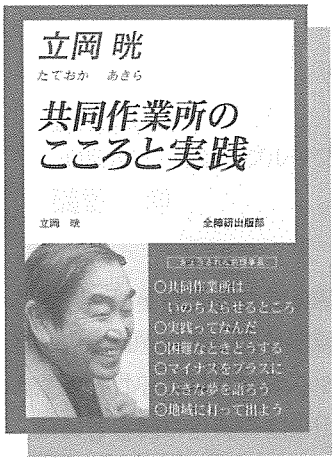
書評

きょうされん副理事長、鴻沼福祉会常務理事
斎藤　なを子



「立岡 晄　共同作業所のこころと実践」（全障研出版部）

数年前のある研修会の会場でのこと。全体会への移動中に「さっきの分科会で率先して机とイスを片づけていた人がいたでしょ。あの人がきょうされんの理事長さん（注；当時）なんだって」「へえー、気取ったところが全然ない方ね」という参加者の会話を耳にした。立岡晄さん（前きょうされん理事長、ひかり福祉会副理事長）の人となりの一端を物語るエピソードである。

その立岡晄さんがこのほど全障研出版部より「立岡晄　共同作業所のこころと実践」を上梓された。立岡さんがきょうされん理事長を務められたうちの5年間を常任役員としてご一緒させていただいた私にとって、活字となった「たておか節」に再び出会えることがとても嬉しかった。と同時に、きっと読みながら今の自分自身の弱さに向き合い、そしてやっぱりがんばらなくてはという気持ちを湧き立たせてもらうんだろうな、という予感がした。それは見事に的中したといっていい。

本編は、立岡さんが月刊「みんなのながい」誌に綴られたものをもとに10の小編とそれをはさんでの序章と補章で構成されている。和子さん、しげやん、よしえさん、美奈子さん、幸恵さん、ヒトミさんたちの生きる姿、人としての力がはぐくまれていく姿が、立岡さんの30年余に及ぶ体験のなかから目に浮かぶ筆致で描かれる。順風ではない。むしろ多くの仲間たちがたいへんな境遇や困難にぶつかりながらも、その人格の豊かさが培われていく。

「共同作業所」がたんなる場としてのみ存在しているのであれば、このような事実はけっして生じなかったであろう。だから立岡さんは、障害者自立支援法の大罪を「共同作業所」が大切にしてきた営みを打ち砕くものとして、人間性のひとかけらもないと一蹴している。そして、重症心身障害をもった信明さんのことをとおして、人間をできるかできないかだけで選別し競争へ駆り立て孤立化させていく社会であってはならないことを静かに、しかし痛烈に告発している。その根底にいっかんして流れているのは、障害のある人たちへのあたたかいまなざしと真摯な思い。立岡さんご自身の人間性と思想の形成の源流も随所にふれられている。

実は本書には、素敵な付録？がふたつもついている。ひとつは、きょうされん滋賀会長の加藤直樹さん（人間発達研究所所長、立命館大学名誉教授）と立岡さんとの対談「この子らを世の光にできる地域づくりを」であり、もうひとつは、きょうされん常務理事の藤井克徳さん（日本障害者協議会常務理事）の寄稿「立岡実践に学ぶ」である。加藤さんは本書から「あらためて共同作業所とはいったいどんなところであるのか根っこのところで学び、再確認した」と述べられ、藤井さんは「きょうされん運動の30年間の足あとを重ねるとき、もう一つの『きょうされん物語』をみる思いがする」と記されている。

「共同作業所」づくり運動はただの器づくりにあらず。その真髄が凝縮されているのが本書である。障害のある仲間たちの願いをいつでも真ん中にすえること、そこにこだわることの大切さとブレない確かさをじんわりと実感できる。きっと多くの読者が、想像力と共感力に著しく欠ける状態にあると思われる彼の国の為政者、政策担当者たちにこそ手にとって欲しいと感じることだろう。